

Title	週刊紙Septとキリスト教聖職者たち
Sub Title	L'hebdomadaire «Sept» et les ecclésiastiques
Author	松本, 鉄平(Matsumoto, Teppei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.163 (84)- 176 (71)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

週刊紙 *Sept* とキリスト教聖職者たち

松本 鉄平

【はじめに】

Sept は、1934年4月から1937年8月にかけて発行された週刊紙である。そこには当時の戦間期においてすでに著名だった人物から、戦後に名を馳せることになる若手まで、様々な世代のカトリック系知識人が集まっていた。J. マリタン、E. ジルソン、F. モーリヤック、G. ベルナノスなどの重鎮をはじめ、M. シューマン、P.-H. シモン、ダニエル＝ロップス、J. マドール、A. マルク、E. ムーニエ、H. ギユマン、U. ファレーズ、M. シェレールなど錚々たるカトリック知識人たちである。

このカトリック週刊紙は、「火の十字団」のラロックや、人民戦線のブルムとの対談記事など、激化しつつあった左右の対立にまたがるスタンスを採っており、それらの立場を当時のカトリック勢力の動きから逆照射できる点においても研究価値がある。

Sept に関する重要な先行研究としては、Aline Coutrot¹ のほかに、Magali della Sudda² のものがある。Coutrot は *Sept* 全体を主題ごとに分けて、多方面から詳細に追いかけている。della Sudda は、Coutrot が十分に扱えなかった *Sept* の謎めいた突然の廃刊に焦点をあてているが、それは本論の主題ではない。

我々が着目したいのは、*Sept* における聖職者たちの役割である。*Sept* は、ドミニコ会によって創刊され、運営も行われていたのだが、実際の記事のほとんどは世俗のカトリック知識人によって書かれていた。しかし他方で、*Sept* が他のメディアと決定的に異なるのは、あくまでドミニコ会による運営という正統性や権威

を確保していたことでもある。

したがって本論では、*Sept*の宗教的正統性を保証していた聖職者たちの記事を検討する。だがその際、Coutrotのように*Sept*を一つの有機的作品のように扱うことはあえて避けたい。というのも多様な議論を宗教のもとに結集した*Sept*の場合、Coutrot自身も認めているように、「しばしば混乱し、時には矛盾している諸傾向³」があったからである。

さて、Coutrotは「その貢献の頻度や扱った主題の重要度からみた、この新聞の真の協力者」のうち、聖職者としては6名を挙げている。それは「Chenu、Chéry、Congar、Maydiou、Renard、Sertillanges⁴」であった。だがCoutrotはこの6人について詳述していない。以下では彼らの発言を整理していく。

【6人の聖職者たち】

彼らのうち最年長であるセルティヤンジュ神父（Antonin-Dalmace Sertillanges, 1863-1948）は、マリタンやジルソンより一つ前の世代にあたる新トマス主義の担い手の一人として有名である。神学と哲学に精通し、パリ・カトリック学院でも道徳哲学の教鞭をとっていた。

科学原理主義的なMarcel Bollとの公開論争⁵では、セルティヤンジュは「人生の目的」などの「一切は、科学の可能性からは遥か遠くにある」とし、宗教がもっぱら関わるものとして道徳の領域を持ち出している。その道徳のうち「徳」としては、憎しみをもたず慈愛をもつこと、エゴイズムや自己愛を捨てること、喜びと苦しみに等しく自らの師であること、他者への協調などを説いている⁶。

この背景には、席に座れずデッキに立ち乗りする市バスの中で、「お互いに騙し、押しつぶし合う現代のおぞましい雑然さ」を想うエッセイのように、科学や個人の肥大した第三共和制への疑念があるだろう⁷。

とりわけ彼には福音書の一部を解説した7回にわたる連載がある。記事の内容もさることながら、聖書の解説が認められるということ自体がセルティヤンジュの地位と、*Sept*という新聞の立場を物語っている。この連載では、「苦しみは栄光への道である」といった宗教観⁸、「名を言い表すことのできない超越者⁹」としての神、キリストの「私はこの群衆を憐れむ」という言葉¹⁰や、大衆への「同情の入り混じった愛¹¹」、キリスト教真理の真实性を担保するための「その生

が完全である者は真実を述べる」という論理¹²、他者を復活させて自らは死ぬという「奇妙にも矛盾した二重の意味¹³」、「キリストは昨日死に、今日も死に、明日も死ぬだろう」という繰り返される罪とそのたびに復活するという希望の両義性¹⁴などが見られる。

ルナール神父 (Georges Renard, 1876-1943) は、マルク・サンニエのシヨン運動出身であり、教皇による1910年シヨン批判のあとは、そうした社会問題への関心に基づいてナンシー大学で法学部教授を担当していたが、妻マルグリットの死をうけて聖職の道に入った。

そうした経歴をもつルナールには、現実社会に対して一定の冷めた目線がある。たとえば選挙に関しては、ルナールはカトリックの投票を促している¹⁵。布教と市民的自由のあいだで宗教擁護を行うことが、彼によればカトリックの投票の行動原則なのである。

しかしながら、ルナールが最も力を入れたのは社会についての考察であった。「自由」と「平等」のもと、すべての人間関係は「契約」として成立するようになったと述べるルナールは、その代わりに自発的な「コラボラシオン」という形態での関係を説く¹⁶。

その「コラボラシオン」を考えるにあたって、「大企業」を基準にすることへの疑問を呈している。ルナールによれば、企業組織のプロトタイプは「家族」仕事であり、「雇用」という関係もその延長線上にある。「雇用」において、雇用主とは、単なる利潤の搾取者ではなく、作業の指揮を執ることを専門とした職人だという。そこには「組織化され、序列化された、持続的なコラボラシオン」として解されるべき関係があり、それが「patron」の本来の定義であり伝統である、と¹⁷。

ルナールは行政や公共サービスに比べて、給与や雇用が不安定な民間企業の給与所得者にも注目している。彼らを「ノマド」と表現し、「契約」というものの脆弱性に対抗するために、「団体協約」がもつ重要性を強調する。つまり個々の給与所得者たちが労働組合として団体に雇用主と労働協定を結ぶことである¹⁸。

また、人的つながりや相互適応を保全するコーポラティズムの意義も再評価している。労働者も株主も「コラボラシオン」という関係における2つの極にすぎないと考えるルナールは、それゆえ株主と同じように、「労働者や非雇用者は、なんらかのかたちで企業の所有権や、その管理、そしてその利潤に参加する」の

でなければならないとする¹⁹。

シェリ神父 (Henri-Charles Chéry, 1902-1977) は、*Sept*の創刊に関わったJuvisyの聖職者たちの一人に数えられ、当時なかでも非常に若かった人物である。社会問題への関心のほか、とりわけ典礼に関する現代化の問題などに長きにわたって取り組み貢献したことで知られている。

当時ウィーン市長だったキリスト教社会党のリヒャルト・シュミッツとの対談記事²⁰では、自治体が公営住宅を建てるのではなく、民間による住宅建造を助成・支援する手法、失業対策や給与の安定維持などのキリスト教社会主義的政策に触れながら、「キリスト教コーポラティズム」の理想にまで話題は及んでいる。

シェリもまたカトリックの選挙参加に関心を示しており、カトリック信者にとつての「良き候補者」を語っている²¹。単に政教分離や反教権主義などへの反対だけでは不十分で、社会観（組合活動への理解、資本主義への批判、金銭や生産活動より「人格」の優先）、家族観（個人よりも家族、家庭という場の重視、国家に優先する両親の教育）、国家観（愛国的カトリック、排外的セクト主義への反対、各国家の個別利益を超えた国際正義の認識、エゴイズムと感情よりも和解と協定の優先）、政治観（権威とは神に由来するという考え、それゆえ政治や銀行の権力者ではなく共通善への奉仕としての統治）など、非常に具体的な基準を呼びかけている。

またタクシー運転手たちの厳しい労働環境を報告するという、聖職者には特殊な記事もある²²。非常に具体的な計算を積み重ねながら、年37 000フランの収入に対し、年26 250フランの支出、さらに社会保険や失業、故障修理代などを捻出せねばならない彼らの状況について、これは「自由主義システムの有害性の典型的な例」と述べ、台数制限、駐車代の割引、過剰競争を防ぐための最低料金や最高料金の法的設定、そして給与の固定などを要求している。

政治的には、独裁国家への危惧を記したものがある²³が、この独裁が「人民戦線」（同年5月に成立）を指していることは非常に興味深い。シェリは極右の肩を持つわけでは決してないと前置きしたうえで、Ph. アンリオのベルピニャンでの演説禁止や、ギーズ公やパリ伯の出る *Paroles royales* という映画のプレイエル館での上映禁止、ラロック率いる「火の十字団」などの諸リーグの強制解散などを挙げ、過剰な弾圧による自由への侵害によって、人民戦線もまた独裁に近づいているのではないかと懸念している。

最後に、カトリック自由教育をめぐるいくつかの記事がある。この場合の自由教育とは、共和国による政教分離の公教育に対する私立カトリック教育である。

自由教育は「階級」的な問題とつながっているのではないかという批判への反論²⁴では、地方では農民や労働者やサラリーマンの子息が通っており、そこには「信仰」、非信者からすれば「確信」に近いものがあるということ、高すぎる学費についても奨学金制度があり、富める者は通常通り払い、貧しい者はより少なく支払うというこのシステムのほうが、共和国側の公教育による全面無償化よりも、本当の正義に近いのではないかとすら述べている。

さらにまた、自由教育のほうがより社会に関心を向けているとも主張し、実際に福音の精神で社会問題を学んでいる学校や（Albert de Mun 校、Stanislas 校、Saint-Louis de Gonzague 校）、ボランティア組織 Saint-Vincent de Paul やカトリック青年労働者連盟 JOC などの社会活動を解説している²⁵。

コンガール神父（Yves Marie-Joseph Congar, 1904-1995）は、世界の教会一致を目指すエキュメニズムなどの改革思想によって長らく思想的迫害を受けながら、第二バチカン公会議では理論的支柱として非常に有名となった神学者である。彼は *Sept* 創刊において Juvisy と並んで中心地となったベルギーの Saulchoir 系の聖職者であり、それゆえシュニユ神父とも深い交流があった。

彼は、のちに第二バチカン公会議の議題となる「エキュメニズム」を早くも取り上げている¹⁶。この言葉自体はプロテスタント由来であり、あまり好まないものではあると言いながら、留保付きで取り入れたコンガールは、今日分裂してしまっているキリスト教徒たちのために歩み寄りや和解の道を探っていくのは望ましいことだと考えている。

また「ヒトラー革命や新しいドイツ」を支える観念にも興味を持っていた。Otto Sheid の著作を参照し、とりわけ Volk という観念は、大衆（populaire）のことでありながら、そこに人種（racial）の意味合いも含まれていることを取り上げ、ナチスは知的・道徳的・創造的な活動ではなく、生物学的所与によってのみ人間を捉えていると解釈する²⁷。

コンガールはしばしばこの民族主義を暗に引き合いに出しているように思われる。人類の文化習俗における多様性に関して語ったとき²⁸も、「民族」に限定された「第三帝国の精神」とは対照的に、「彼らの文化、言語、固有の特性の犯しがたい豊かさ」を認め、カトリックにおいて多様な民族がキリストのもとに結集

していけるというロジックが見え隠れする。

また独裁主義とは異なる仕方での人々の統一の可能性を考察した記事もある²⁹。「エゴイズムを放棄し、それぞれの働きを全体の要請に合わせ、一つの部分として他の部分と協力しながら、全体の共通善へと向かうこと」が実現するにはどうしたらいいのか。彼は2つの可能性しかないと言う。すなわち「独裁か、もしくは自由なコラボレーションか」である。独裁において、人間は単なる生産者として、社会は経済体制としてしか見なされない。そこにおける共通善とは「国家の経済的生産性」でしかない。これに対して「自由なコラボレーション」は自由な協力 (libre coopération) であり、物質的な必要性によるつながりとは関係なく、精神的な次元で自発的につながる関係であるらしい。

シュニュ神父 (Marie-Dominique Chenu, 1895-1990) も、ベルギーの Saulchoir 系のドミニコ会士であり、新トマス主義者の一人として哲学や神学の理論的・文献学的研究に精通していた。それゆえ手法や関心の近かったエティエンヌ・ジルソンとの親交でも知られている。

左派に接近していると批判されるドミニコ会を歴史的経緯から弁護した記事³⁰では、「教会が最も危機的な状態を迎えた」時代を引き合いに出している。保守主義によって社会の変化に盲目となった封建時代への反省から、新しい人口流入が始まっていた都市の大学で活躍するようになったドミニコ会とフランシスコ会の歴史を思えば、現代もドミニコ会の自由の精神こそカトリック全体の存続に貢献するはずだと弁護しているのである。

シュニュはまた「キリスト教徒たちの統一は、自由を犠牲にすることでしか実現しないのだろうか？」という問いも立てており、教会の統一というものが権力ではなく権威、つまり現世と異なる「神秘 (mystère)」に結びついていなければならぬとする³¹。この次元のちがいに、「統一」と「自由」を両立させるシュニュの論理がある。すなわち、神秘に由来する「恩寵の法」は、「現世において受動的に同意される責務のネットワーク」を否定するわけではないが、決して縛られないというのである。「キリスト教徒は (…), どこにでも身を投じるが、どこにも加盟しない」。それがシュニュによれば「神の子たちの自由」というあり方なのである。

メイディウ神父 (Jean-Augustin Maydiou, 1900-1955) は、ドミニコ会における人的交流の中心人物である。のちにレジスタンスにおいても重要な役割を演

じ、モーリヤックらと並んでカトリック系抵抗運動でも名を馳せた。彼の署名入りの記事はなかなか見当たらないが、断片的にメイディウー自身の表現を見つけることができる³²。やはりメイディウーにも、キリスト教を社会や大衆の問題に開いていくという関心があり、それは「キリストはもはや自らの住処に閉じこもっているのではなく（…）、我々とともにあらゆる場所に偏在する」と語る言葉からもうかがえる。

なぜCoutrotの挙げた6名に含まれているのか。その理由は、メイディウーがSeptの活動や講演に関わって各地を飛び回っていたからだと思われる。彼の名前はLes Amis de SEPTの報告欄に頻繁に現われる。この報告でとりわけ興味深いのは、彼の活動がモロッコにまで及んでいるという点である³³。カサブランカ、ラバト、タンジェのAmis de SEPT支部に招待され、講演や夕食会を通じて、彼はアフリカでの交流も進めている。

【その他の聖職者たち】

以上がCoutrotの挙げた6名の聖職者であるが、その他にもSeptに関わった聖職者たちがいる。

まずSeptの発行人であり主幹だったベルナド神父（Marie-Vincent Bernadot, 1883-1941）である。しかし、一面やSept名義の記事はJ. フォリエが手掛けていたという³⁴。だが、彼の名はSept周辺の活動に関するレポート記事に登場する。

たとえば1936年バチカンで行われたカトリック雑誌国際博（4月～11月にかけて開催）では、Septを代表してベルナドが現地に向かった事実が報告されている³⁵。La Croixの編集長メルクランや、l'Action populaireのデビュクワ、La Vie catholiqueのF. ゲイと共に、ベルナドの名前がある。また同博にて二度目の会議が行われた際には、教皇の滞在するカストル・ガンドルフォに招かれ、ベルナドは教皇に45分も謁見を許された。教皇はベルナドたちの活動を高く評価していたという³⁶。

またSeptの関係者が集まる宴での乾杯の音頭も残されている。「精神的なものの優位³⁷」や「フランスにキリスト教的な観念をふたたび花開かせること³⁸」などが率直に語られている。Septの発行に至るまでの経緯が詳しく述べられたインタビュー記事³⁹では、Septの目的を「キリスト教の光のもとで現代のあらゆる間

題を考察すること」であると明言している。「Septはカトリック新聞である」。

もう一人、重要なのは当時のドミニコ会の総長だったジレ神父 (Martin Stanislas Gillet, 1875-1951) である。彼はもともとスイスのフリブール大学で哲学博士となり、ベルギーのルーヴァン大学で教鞭もとっていた。ジレが自ら書いた記事はG. K. チェスタトンによるトマス・アクィナスの評伝についてである⁴⁰。教義に一部触れるような引用や考察が可能なのはドミニコ会における彼の立場ゆえであろう。

また講演での発言もしばしば報告されている。たとえば資本主義を糾弾しながらも、「正義への同じ願望をもっているとしても共産主義には与しない」とするジレは、人間についての考え方や、暴力という手段に関する相違を強調している⁴¹。また激化するスペイン戦争の頃には「スペインの兄弟たちはドミニコ会の伝統を維持している」と述べ、かつて極東で殉教していったドミニコ会士たちの歴史に照らし、「スペインの兄弟たちを誇りに思うべき」とする⁴²。

ほかには、当時のパリ大司教だったヴェルディエ枢機卿 (Jean Verdier, 1864-1940) も多くの記事を寄せている。大衆の要求を聞き、彼らに聖なる正義を与えるような教会の社会理論を考えるヴェルディエは、「資本家の手中に積もっていく財の一部が、公正な規模に減らされていき、そのうちの十分な量が労働者たちに行き渡る」ことを求めている⁴³。

また「戦争は神学的な意味において、『愚かで不合理な行いである』』という言葉は、2回にわたって特集されている^{44 45}。教会については、我々の社会秩序の悪徳を非難し、真の正義と賢明な平等を労働者たちに想起させ、平和と兄弟愛の雰囲気を作り出す義務を感じており⁴⁶、「新しい方法」の必要性、富に新しい条件を当てはめることなどを説いている⁴⁷。

ヴェルディエの次にパリ大司教となるシュアール枢機卿 (Emmanuel Suhard, 1874-1949) の名前も見られる。シュアールは、当時ランス大司教だった。彼のSeptへの関わりは少なかったようだが、それでも「カトリック信者による共産主義者とのコラボレーションは、対立する教義という観点から、絶対に非難されるべきものである。」「しかし共産主義と共産主義者たちについては区別するほうが良い」というコメントが、二度にわたって大々的に掲載されているため^{48 49}、その発言の影響は小さくなかったと思われる。

さらにその次のパリ大司教となるフェルタン大司教 (Maurice Feltin, 1883-

1975)も同様である。彼は、当時ボルドー大司教であり、Amis de SEPT会合での演説が大きな見出し記事で全文掲載されている⁵⁰。そこでフェルトンは、「Septは我々の生きる困難な時代において、必ずや最重要な役割を演じるものである」と断言しており、この言葉は後日あらためて再掲されている⁵¹ことから考えても、Septにとって貴重な証言だったようだ。

最後にもう一人、特筆しておきたいのは40年ものあいだリール司教を務めたリエナール枢機卿（Achille Liénart, 1884-1973）である。労働者層が多く左派の強いリールでの経験は、のちの第二パチカン公会議での活躍につながり、当初は保守的なまま進もうとしていた公会議の流れを一変させることになる。

当時から彼は「右にも囚われず、左の人質にもならず」、「政治的なアジェーションの外で、カトリックとして、独立した者として居続けよう」という政治的位置取りを呼びかけていた⁵²。彼が奉じるのはキリスト教社会主義であり、これを革命的だとかキリスト教赤軍と呼ぶ人々とは手を切らねばならない、と述べた言葉が大きく取り上げられた⁵³。

この発言は講演の一部であり、その全文は翌週に発表された⁵⁴。そこでは自由な労働組合、職業組織、コラボラシオン、合同委員会、労働の団体契約などカトリックの社会的教義と、さらにこれらが実を結ぶための「慈愛に由来する兄弟愛の精神」「正義についての道徳的感覚」「与えられた言葉への尊敬」「他者の尊厳への配慮」といった道徳的教義との組み合わせが語られている。

それでも社会問題の解決に関して、カトリックが共産主義と結託できないのは、ソ連における司祭や雇用主や知識人の投獄、財産没収、シベリア追放などの手法による。リエナールは、「キリスト教の解決策はもっと人間的で、もっと有効な別の仕方である」と言い、道徳的な価値観（平等性、正義と慈愛、分断よりも握手など）を共有することによって、制度上の急進的な刷新よりも、むしろスムーズに改革を進められると考えた⁵⁵。

また極右勢力による日常的な中傷キャンペーンが内相サレングロを自殺に追い込んだ事件については、「誹謗中傷は、神が糾弾する過ちであり、そうした権利など与えられていない」と憤り⁵⁶、やはり「慈愛の掟」といった「道徳的分野」が欠如した宗教なき政治を批判している。

【おわりに】

本論の目的は、*Sept*に関わった聖職者たちが、それぞれどのような主張を行っていたかを確かめることだった。一概に「聖職者」といっても、どのような論者が関わっていてどういった関心や主張を持っていたのかはある程度取り出せたのではないだろうか。

自由で多様な言論が認められたとされる *Sept* だが、本論で見たとおり、こと聖職者に限って見ると根本的な論点については非常に統制がとれていたように思われる。したがって彼らは、決して *Sept* の中心というわけではないが、楔のような役割を果たしていたといえるのかもしれない。

残念ながら紙幅の都合により、思想そのものを掘り下げことはできなかった。聖職者たちがカトリック知識人たちの議論をかなり下敷きにしていただろう可能性があるため、これを考察するには、議論の前提を作ったであろう論者たちの思想も取り上げねばならない。

最後に、機会をあらためて *Sept* に大量の記事を寄稿していた中心人物たち（J. フォリエ、A. マルク、ダニエル＝ロップスなど）についても、調査し整理する必要があるだろう。そうすることで当時のカトリック知識人たちの思想や活動がさらに見えてくるはずである。

【注】

-
- 1 Aline Coutrot, *Un Courant de la pensée catholique l'hebdomadaire Sept*, Edition du Cerf, 1961.
 - 2 Magali della Sudda, La suppression de l'hebdomadaire Sept, dans *Vingtième Siècle. Revue d'histoire*, avril 2009 (N°104), pp.29-44.
 - 3 Coutrot, *op. cit.* p.63
 - 4 *ibid.*, p.61.
 - 5 « Le Père Sertillanges à M. Marcel Boll », *Sept*, 2 juin 1934.
 - 6 « Portrait du Sage », *Sept*, 18 janvier 1935.
 - 7 « Prière en autobus », *Sept*, 22 novembre 1935.
 - 8 « La Transfiguration », *Sept*, 6 mars 1936.
 - 9 « Le Démon chassé », *Sept*, 13 mars 1936.

- 10 « La Tentation du Désert », *Sept*, 28 février 1936.
- 11 « La multiplication des pains », *Sept*, 20 mars 1936.
- 12 « Dimanche de la Passion », *Sept*, 27 mars 1937.
- 13 « Les Rameaux », *Sept*, 3 avril 1936.
- 14 « La Résurrection », *Sept*, 10 avril 1936.
- 15 « Devoir électoral des Catholiques », *Sept*, 24 avril 1936.
- 16 « Mythes, mystiques, réalités », *Sept*, 30 octobre 1936.
- 17 « Entreprise et collaboration », *Sept*, 6 novembre 1936.
- 18 « Statut des Salariés », *Sept*, 13 novembre 1936.
- 19 « Entreprise et corporation », *Sept*, 4 décembre 1936.
- 20 « Un entretien avec le D^r Schmitz », *Sept*, 31 janvier 1936.
- 21 « Avez-vous VU l'Église faire les élections ? », *Sept*, 3 avril 1936.
- 22 « La juste cause des chauffeurs de taxi », *Sept*, 8 mai 1936.
- 23 « Liberté ou fascisme...? », *Sept*, 3 juillet 1936.
- 24 « Notre Enseignement libre est-il un enseignement de classe ? », *Sept*, 31 juillet 1936.
- 25 « Notre Enseignement, un enseignement social », *Sept*, 7 août 1936.
- 26 « Pour l'unité de tous les Chrétiens », *Sept*, 17 janvier 1936.
- 27 « L'Esprit du III^e Reich », *Sept*, 14 février 1936.
- 28 « Peuples, Races et Cultures », *Sept*, 31 juillet 1936.
- 29 « France, nation chrétienne par M.-J Congar », *Sept*, 28 mai 1937.
- 30 « Unité et Liberté », *Sept*, 28 mai 1937.
- 31 « La Liberté dominicaine », *Sept*, 10 juillet 1936.
- 32 « Leçons », *Sept*, 27 novembre 1936.
- 33 « Les Amis de SEPT », *Sept*, 10 janvier 1936.
- 34 Coutrot, *op. cit.* p.58
- 35 « Les Idées et la Vie », *Sept*, 29 mars 1935.
- 36 « À Rome, le Congrès des Journalistes Catholiques », *Sept*, 2 octobre 1936.
- 37 « Le Banquet de SEPT », *Sept*, 31 juillet 1936.
- 38 « Le Banquet de SEPT », *Sept*, 21 février 1936.
- 39 « Les Éditions du CERF, au service de l'Action Catholique », *Sept*, 11 décembre 1936.
- 40 « Chesterton, peintre de saint Thomas », *Sept*, 29 mars 1935.
- 41 « Le père Gillet devant le communisme », *Sept*, 18 décembre 1936.
- 42 « Le sang des martyrs », *Sept*, 9 avril 1937.
- 43 « Pour un ordre social chrétien », *Sept*, 15 mars 1935.
- 44 « Le message de Noël du Cardinal Verdier », *Sept*, 17 janvier 1936.
- 45 « Voix catholiques de France... », *Sept*, 20 mars 1936.
- 46 « Appel aux Catholiques », *Sept*, 12 juin 1936.

- 47 « Le Cardinal Verdier déclare... », *Sept*, 30 avril 1937.
 48 « D'un bout du monde... », *Sept*, 31 juillet 1936.
 49 « SEPT contre le communisme », *Sept*, 26 mars 1937.
 50 « *Sept* est destiné à jouer un rôle de premier plan », *Sept*, 4 décembre 1936.
 51 « Les Éditions du CERF, au service de l'Action Catholique », *Sept*, 11 décembre 1936.
 52 « Soyons nous-mêmes », *Sept*, 14 février 1936.
 53 « D'un bout du monde... à l'autre bout », *Sept*, 30 octobre 1936.
 54 « Discours de M^{fr} Liénart », *Sept*, 6 novembre 1936.
 55 « Débat sur le Communisme », *Sept*, 13 novembre 1936.
 56 « Paroles chrétiennes sur la tombe de Roger Salengro », *Sept*, 27 novembre 1936.

【参考文献】

Aline Coutrot, *Un Courant de la pensée catholique l'hebdomadaire Sept*, Edition du Cerf, 1961.

Magali della Sudda, La suppression de l'hebdomadaire Sept, dans *Vingtième Siècle. Revue d'histoire*, avril 2009 (N°104), pp.29-44.

※以下の参考文献は、人物ごとに整理して系統立てた。

記者名が不明である場合は、題名のみ記している。

Antonin-Dalmace Sertillanges :

A.-D. Sertillanges, « Le Père SERTILLANGES à M. Marcel BOLL », *Sept*, 2 juin 1934.

A.-D. Sertillanges, « Portrait du Sage », *Sept*, 18 janvier 1935.

A.-D. Sertillanges, « Prière en autobus », *Sept*, 22 novembre 1935.

A.-D. Sertillanges, « La Tentation du Désert », *Sept*, 28 février 1936.

A.-D. Sertillanges, « La Transfiguration », *Sept*, 6 mars 1936.

A.-D. Sertillanges, « Le Démon chassé », *Sept*, 13 mars 1936.

A.-D. Sertillanges, « La multiplication des pains », *Sept*, 20 mars 1936.

A.-D. Sertillanges, « Dimanche de la Passion », *Sept*, 27 mars 1937.

A.-D. Sertillanges, « Les Rameaux », *Sept*, 3 avril 1936.

A.-D. Sertillanges, « La Résurrection », *Sept*, 10 avril 1936.

Yves Marie-Joseph Congar :

Y. Congar, « Pour l'unité de tous les Chrétiens », *Sept*, 17 janvier 1936.

Y. Congar, « L'Esprit du III^e Reich », *Sept*, 14 février 1936.

Y. Congar, « Peuples, Races et Cultures », *Sept*, 31 juillet 1936.

Y. Congar, « France, nation chrétienne par M.-J Congar », *Sept*, 28 mai 1937.

Marie-Dominique Chenu :

M.-D. Chenu, « Unité et Liberté », *Sept*, 28 mai 1937.

M.-D. Chenu, « La Liberté dominicaine », *Sept*, 10 juillet 1936.

Georges Renard :

G. Renard, « Devoir électoral des Catholiques », *Sept*, 24 avril 1936.

G. Renard, « Mythes, mystiques, réalités », *Sept*, 30 octobre 1936.

G. Renard, « Entreprise et collaboration », *Sept*, 6 novembre 1936.

G. Renard, « Statut des Salariés », *Sept*, 13 novembre 1936.

G. Renard, « Entreprise et corporation », *Sept*, 4 décembre 1936.

Henri-Charles Chéry :

H.-Ch. Chéry, « Un entretien avec le D^r Schmitz », *Sept*, 31 janvier 1936.

H.-Ch. Chéry, « Avez-vous VU l'Église faire les élections ? », *Sept*, 3 avril 1936.

H.-Ch. Chéry, « La juste cause des chauffeurs de taxi », *Sept*, 8 mai 1936.

H.-Ch. Chéry, « Liberté ou fascisme...? », *Sept*, 3 juillet 1936.

H.-Ch. Chéry, « Notre Enseignement libre est-il un enseignement de classe ? », *Sept*, 31 juillet 1936.

H.-Ch. Chéry, « Notre Enseignement, un enseignement social », *Sept*, 7 août 1936.

H.-Ch. Chéry, « Notre Enseignement fait-il des chrétiens ? », *Sept*, 21 août 1936.

Jean-Augustin Maydiou :

« Les Amis de SEPT », *Sept*, 10 janvier 1936.

J.-F. Maydiou, « Leçons », *Sept*, 27 novembre 1936.

Martin-Stanislas Gillet :

M.-S. Gillet, « Chesterton, peintre de saint Thomas », *Sept*, 29 mars 1935.

« Le père Gillet devant le communisme », *Sept*, 18 décembre 1936.

« Le sang des martyrs », *Sept*, 9 avril 1937.

Marie-Vincent Bernadot :

« Les Idées et la Vie », *Sept*, 29 mars 1935.

« Le Banquet de SEPT », *Sept*, 21 février 1936.

« Le Banquet de SEPT », *Sept*, 31 juillet 1936.

J. Maritain, « Allocution de M. Jacques Maritain », *Sept*, 31 juillet 1936.

« À Rome, le Congrès des Journalistes Catholiques », *Sept*, 2 octobre 1936.

« Les Éditions du CERF, au service de l'Action Catholique », *Sept*, 11 décembre 1936.

Jean Verdier :

J. Verdier, « Pour un ordre social chrétien », *Sept*, 15 mars 1935.

J. Verdier, « Une lettre du Cardinal Verdier à Choisir », *Sept*, 8 novembre 1935.

J. Verdier, « Le message de Noël du Cardinal Verdier », *Sept*, 17 janvier 1936.

J. Verdier, « Voix catholiques de France... », *Sept*, 20 mars 1936.

J. Verdier, « Appel aux Catholiques », *Sept*, 12 juin 1936.

« 28° Pèlerinage français du rosaire à Lourdes », *Sept*, 11 septembre 1936.

« D'un bout du monde... », *Sept*, 8 janvier 1937.

J. Verdier, « Le Cardinal Verdier déclare... », *Sept*, 30 avril 1937.

J. Verdier, « Une lettre du Cardinal Verdier », *Sept*, 7 mai 1937.

J. Maritain, « Interview de Jacques Maritain », *Sept*, 28 mai 1937.

Emmanuel Suhard :

« D'un bout du monde... », *Sept*, 31 juillet 1936.

« *Sept* contre le communisme », *Sept*, 26 mars 1937.

Maurice Feltin :

M. Feltin, « *Sept* est destiné à jouer un rôle de premier plan », *Sept*, 4 décembre 1936.

« Les Éditions du CERF, au service de l'Action Catholique », *Sept*, 11 décembre 1936.

Achille Liénart :

« Soyons nous-mêmes », *Sept*, 14 février 1936.

« D'un bout du monde... à l'autre bout », *Sept*, 30 octobre 1936.

A. Liénart, « Discours de M^{gr} Liénart », *Sept*, 6 novembre 1936.

A. Liénart, « Débat sur le Communisme », *Sept*, 13 novembre 1936.

A. Liénart, « Paroles chrétiennes sur la tombe de Roger Salengro », *Sept*, 27 novembre 1936.

A. Liénart, « Une note de S. E. le Cardinal Liénart », *Sept*, 14 mai 1937.